
千壁の織り手

遙かなる歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千壁の織り手

【Nコード】

N4441Y

【作者名】

遙かなる歌

【あらすじ】

灼眼のシャナの二次創作です。悠二がフレームヘイズになるので嫌いな方はUターンをおすすめします。この作品は灼眼のシャナの原作を読んでいないと理解できない部分があるので読む方ようつと言っても過言でありませんのであしからず。”甲鉄竜”イルヤンカが生きていたらIFものです！不定期更新になるかもしれないですけどできるだけがんばっていききたいです！！

過去：大戦（前書き）

プロローグとなります。

過去…大戦

時は十六世紀初頭。

所は、神聖ローマ帝国。

封絶もまだ開発されていない時代に起きた”フレイムヘイズ”と”紅世の徒”による大戦争。

後に『大戦』と呼ばれ、両者の記憶に深く刻み込まれるのであった。

その『大戦』も終わりを迎えようとしていた……

”棺の織り手”アシズ率いる”紅世の徒”の大集団「トーテン・クロツケとむらいの鐘」の

『両翼』の二人…”虹の翼”メリヒムと”甲鉄竜”イルヤンカはフレイムヘイズ兵団最強

の二人…

”天壤の劫火”アラストールのフレイムヘイズ『炎髪灼眼の討ち手』マティルダ・サントメール

”無幻の冠帯”ティアマトーのフレイムヘイズ『万条の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメル

と長い戦いに決着をつけようとしていた。

『両翼』の二人は『騎士団^{ナイト}』を蹴散らしマテイルダに突撃をかけた。

否、

かけようとした。

『両翼』の左：“甲鉄竜”イルヤンカはヴィルヘルミナのリボンに絡めとられて投げ飛ばされていた。

「ぬうつ!？」

イルヤンカはすぐに『騎士団』の展開がこの攻撃を隠すために行われたことに：

だが、メリヒムではなく、自分を投げ飛ばしたことが分からなかった。

イルヤンカは真名の通り鎧を纏った竜である。

投げ飛ばされただけではかすり傷一つつかないだろう。

（だったら、なぜ儂を投げた？メリヒムならまだ有効になる可能性があるというのに：）

イルヤンカは一瞬の内に今までの戦いで培った勘と知識を総動員させていた。

（ヴィルヘルミナ・カルメルが無駄なことをするとは思えん…ん？）

一瞬なにかがよぎる…五日前自分は どうして深手を負った？それは
投げ飛ばされ叩きつけられた
から……

(っ!?!まさか!?!)

イルヤンカが気づいた瞬間…

「—————はあああっ!?!」

ヴィルヘルミナらしくない雄たけびともに豪快な蹴りがイルヤンカ
の腹を直撃した。

その蹴り自体は問題はない。

しかし、その蹴りによって得られた加速によってさらにイルヤンカ
の落下速度は増していった。

イルヤンカの落下先、それは…

形質硬化の自在法が延々と刻み込まれて桜色に発光している尖塔だ
った。

「うおおおおっ!?!」

イルヤンカは『幕障壁』の展開が間にあわないと悟ると少しでも致
命傷を避けるためにその
巨体を捻る。

だが…

「ゴアアアアア———!!」

尖塔はイルヤンカの脾腹を貫いた。

「イルヤンカ!？」

『両翼』の右…メリヒムが驚愕の声を上げる。

しかし、その声は盟友に向かって言う最後であろう叫びによって遮られる。

「離れ、ろ!!!!」

悪く言うと思あがき、良く言っても最後のあがき…

そんな『幕瘴壁』をヴィルヘルミナに向かって放った。

「グアオオオオオオ!!」

狙いが定まらないのか拡散させて。

「っ!？」

「退避!!」

二人にして一人の『万条の仕手』がそれぞれ声をあげた。

イルヤンカは『幕瘴壁』の命中を見届ける前に衝撃により中ほどから折れた尖塔ともに落下していた。

そこで、古龍は意識を手放した：

イルヤンカが目を覚ましたのは数分後だった。

そこには先ほどまで死闘を繰り広げた者が共に戦を潜り抜けた戦友のように座っていた。

イルヤンカを背もたれにして。

「儂は…負けたのだ、な…」

イルヤンカは誰に言うでもなく自分の脾腹を見てつぶやいた。

どこからどう見ても戦闘は続行不可能である。

「…我々が勝ったわけではないのであります」

「危機一髪」

『万条の仕手』は独り言に律義に答える。

が、その顔はいつもの無表情ではなく、苦痛で歪んでいた。

「…っふ。そうか…」

イルヤンカは苦笑を漏らす。

「そろそろ行かなくてはいけないのであります」

「優先事項」

ヴィルヘルミナは討滅しきっていないイルヤンカを明らかに気にしていた。

しかし…

「行け！！『万条の仕手』！！」

イルヤンカは言う…

「貴様はこんなところで油を売っていていいのか？」

死力を振り絞り…

「自分のことに決着をつけろ！！」

そして…

「あの男を振り向かせて来い！！そして儂に…」

「見せ……て…く…」

また意識を手放した…

イルヤンカは目を覚ます。

焼け野原で。

紅蓮になにかも焼かれてしまった場所で。

自分の主の火の粉が散っている場所で。

涙で濡れた大地の上で。

その涙が自分のものだ気づくのに少々時間を要した。

「……………」

無言の中紅蓮が燃えている音だけの中で考えた。

主が愛した人間とはどんなものなのか？主が憎んだ人間はどんなものなのか？

考えても出てこなかった：

だから：

イルヤンカは自分で”見る”ことにした。

そうして”甲鉄竜”イルヤンカはもう忘れてしまったかもしれない

人化の自在法を使った…

第一話：始まり（前書き）

イルヤンカの口調が難しいです（泣
でも、挫けずやります！！

第一話：始まり

時は春休み。

坂井悠二^{さかいゆうじ}は自分以外の人と物の時間が止まっている陽炎のドームの中にいた。

そのドームの中で動くものは二つ、

一つは自分：坂井悠二

二つ目は異様な怪物…？

悠二は異様な怪物の姿を見て硬直しながら考えた。

なぜ自分以外の人がとまっているのか？あの怪物はなんなのか？ま
ずこれは現実か？

結論：

「そうか…夢か」

人間、処理できない事態に陥ると現実逃避を始める。

悠二も例外ではなかった。

夢から覚めること願いつつ自分の頬をつねった：

「つつ！？」

夢（幻想的な願い）は覚めて現実（陽炎ドーム）に舞い戻っただけだった。

「？」

異様な怪物が悠二の気配に気づいた。

「は、は、ははは…」

悠二はもう笑うしかなかった。

「トウ…メ…ツノ…ドウ…グ…」

異様な怪物はなんらかわけのわからないことを言っているが悠二の耳には入ってこなかった。

ただ…

「アルジ…ノ…カタキーーーーー！！」

危機だけは感じていた。

悠二は自分の終わりを感じ目を閉じた。

こんな終わり方を迎える人生なんて貴重じゃないか？ っとどうでもいいことを考え
ほど悟っていた行動だった。

「グワアアアアア!」

聞こえた断末魔は自分のものではなく…

異様な怪物のものだった。

「…トーチとフレイムヘイズの区別もつかなくなるほどまでとは…
…哀れだ。」

さっきと変ったところが二か所あった。

一つは何故か自分の前に立っている老人。

二つ目は地面から生えて岩に串刺しにされている異様な怪物。

「は?」

悠二は混乱した。むしろ混乱するなという方が無理な気がする気がした。

「すまない…すぐ終わる待っておれ…『ミステス旅する宝の蔵の少年』よ」

「?」

悠二は老人の言葉のすべては理解できなかったがじっとしていればいいことはわかった。

「…哀れな^{リンネ}燐子よ。最後はこの儂が見とってやる」

「アルジヨー！！！」

「『主』か…、貴様と儂は似ているのかもしれんな…」

少し老人は躊躇ってから…

「さらばだ！！哀れな燐子よ！！！」

地面に手を叩きつけた。

そして、

ドドド！！

また地面から岩が生えていきた。

やがてそれは鈍色に炎となって消えていった。

異様な怪物と共に…

「さて、少年…」

老人はまた躊躇ってから言う。

「この世の本当のことを知りたいか？」

悠二は無意識の内に首を縦に振っていた。

「僕は既に死んでいるだって!？」

悠二たちはとあるカフェに来ていた。(悠二の奢りで)

悠二はこの世の本当のことをある程度聞いて驚愕の声をあげた。

「…大声控えた方がいい」

悠二は周りを見渡してから

「…すいません」

「まあ気にするでない」

「…あなたの話の通りだとあなたも”紅世の徒”で人間を喰らって生きているんですよね？」

「…少し誤りがあるな」

「へ？」

悠二は間拔けな声をあげた。

「僕は”紅世の徒”の中でも格別強い力を持っていたので”紅世の王”と呼ばれ

いる」

老人はそれとつとなげる。

「儂はここ500年人間を喰らっていない」

「へ？」

悠二は今日三度目の間抜けな声をあげる。

一度目は御崎市のCDショップであげている。

「そういうと”紅世の王”とは言えず”紅世の徒”にも劣る力しか持っていないが」

「さっき倒したのは？」

「あれは”燐子”という”紅世の徒”が作る道具や使い魔のようなものだ」

「……あなた名前は？」

「は？」

今度は悠二が驚愕の声を上げさせる番だった。

「名前あるんだろ？呼びにくいという…なんというか」

「ああ、そういうことか…」

「で、なんていうんだ？」

「儂の名は”甲鉄竜”イルヤンカ という」

”甲鉄竜”？」

「”紅世の徒”のもつ真名というものだ。もちろんかぶっているものはない。つけくわておくが今は人化の自在法をしてるため竜の姿ではないぞ」

「結局どっちでよべばいいんだ？」

「イルヤンカでよい」

「じゃあ、改めてイルヤンカ」

「なんだ？」

「なんで僕を助けたんだ？」

悠二は話を聞くにつれてつもっていった疑問をぶつけた。

「……儂には仕えるべき主がいた」

”紅世の王”誰かに仕えるのか？」

「ああ、主は今亡き”紅世の徒”の大集団「トーテン・グロッケとむらいの鐘」を納めていた」

「……」

悠二は黙って聞いていた。

イルヤンカの顔がどこか悲しそうだったから。

「その集団の『両翼』の左として主のために腕をふるい数々の”フレイムヘイズ”をこの手にかけてきた」

「”フレイムヘイズ”って”紅世の王”が人と契約して”紅世の徒”を狩る復讐者だっけ？」

「うむ、その通りだ。契約した”紅世の王”はこの世と紅世のバランス保つために契約していることも話したな？」

「うん。で、イルヤンカは今までどうして来たの？」

「今までとは？」

悠二は意図してイルヤンカに過去の話をやめさせた。

「『主』のために腕をふるった後」

「ああ、その後はトーチを積みながら生きながられた」

「……トーチ、か……」

悠二は自分の胸に宿る灯を見ながらつぶやく。

だが、絶望はしなかった。

「……なんで、人を喰らわなかったの？」

「…人の可能性を見たくて、な」

「……」

「……」

二人はしばらく無言になり、やがて悠二が口を開いた。

「ありがとう」

「はて？」

「『この世の本当のこと』を教えてください」

「普通は終わりを運んだものとして儂を恨むものだが…」

「恨む要素がないじゃないか。これからの人生をどうやって生きていけばいいかわかったんだから」

イルヤンカは少し考えるような仕草をしてから

「ふ、ふ、ふふ、そうか…なら変わりとってはなんだが…」

忍び笑いを漏らしながら悠二に要求をした。

「この町のことを教えてくれないか？」

悠二は困った顔をして

「無理かな」

「……」

「ごめん。僕は隣町の御崎市に住んでいてこっちに来たのはたまたまなんだ」

「ふむ。では、その『御崎市』とやらに行こう」

「今から？」

「今からだ！」

イルヤンカは少し機嫌が悪いように見える（拗ねているだけだが）

ともかく悠二の目的のCDは買えないようだ。

「ここが『御崎市』か…」

「どうしたの？」

「この町に”紅世の王”がいる」

「へ？」

今日もう何度目となる驚愕の声をあげる悠二。

「それにトーチの数も異様に多い……なにか目的があるのか？」

「……」

悠二は友人や家族のことを心配したが今はどうしようもないと割り切った。

「まあ、今の儂に関係ないが。では、案内を頼みましょう。少年」

「わかったよ…。それとその『少年』って言うのやめてくれないか？」

「ではなんて呼べばよい？」

「『悠二』で頼むよ。こっちもイルヤンカって呼んでるんだしさ」

「では、悠二。頼んだぞ。」

「うん」

「じゃあ、僕はそろそろ帰るから」

「うむ、今日は世話になったな」

「こちらこそ。家はすぐそこだから、またいつか」

「ああ、因果の交差路で…」

ブオオオン

別れを告げていた二人を包んだのは陽炎のドーム…

『封絶』だった。

第一話：始まり（後書き）

悠二のイルヤンカに対する口調はラミーに対する口調と同じ感じに
しました

第二話：契約

『封絶』…それは因果の孤立空間を作りだし周りから時の干渉等うけなくなり壊れたものも

『封絶』を解く前なら修復できる（存在の力を失ってしまったものは不可）

つと、悠二はさっきイルヤンカに聞いたことを思い出していた。

『封絶』の周りには黄緑色の火の粉が舞っていた。

「ヒイイイヤハアアア!!」

「「!?!」」

悠二とイルヤンカは頭上からの声に同時に身構える。

ドン!!

上から降ってきた”徒”と思われる者は青年の身なりをしていた。

「さっすが、俺様!! この気配けはぐんぺい隠蔽いんぺいの自在法に余念がないぜ!! 封絶張るまで

気がつけねえな!! おい!!!!」

「「……」」

悠二はこんな”徒”がいるのか? っと思ひ黙り。

イルヤンカは今の状況を打破する方法を考えていた。

「おい！おい！その”紅世の徒”さんよ！存在の力よこせ！！」

「…なぜ貴様にやらねばならぬ」

「は！？人から喰っても微々たるもんしか得れねェから”徒”狙ってたらお前がいたから」

「……そうか『同胞を喰らう者』つというわけか」

「ごめーとう！！でもって死ね！！」

青年の姿をした”徒”は黄緑色の炎弾を放ってきた。

「悠二！！」

「え！？」

イルヤンカは悠二を抱えて横に飛ぶ。

「おい！おい！」ミステス”なんて所詮”トーチ”だろ？なに庇ってんだよ！！」

そう言いながら”徒”はまた炎弾を放った。

「悠二！逃げるぞ！！」

「え、うん！！」

確認をとってからイルヤンカは前方に『幕瘴壁』を張った。

『幕瘴壁』は全ての炎弾をうけてもビクとしなかったが…

「そんなの張っても上から撃たれちゃ意味ないぞ!!」

ドドドドドド!!

”徒”は『幕瘴壁』を乗り越えて炎弾を複数放った。

が、そこには炎弾で抉れた道路しかなかった。

「ツチ!! けどまだ封絶内にいるみてゝだな!! 俺様から逃れられると思うなよ!!」

「はあ、はあ、はあ」

悠二は力の限り走り疲労しきっていた。

「悠二、大丈夫か？」

「だいじょばないかもね、ははは」

悠二は人生の終わりを感じイルヤンカに問う。

「……この状況なんとかできる？」

「正直無理だ。儂の『幕瘴壁』も張れて一回、生き残る術はほぼないな……」

「ほぼ？」

悠二はイルヤンカのはっきりしない回答に疑問を抱く。

「悠二……」

イルヤンカは問う。

「今、力を得れるとして貴様はなにを望む？」

悠二は答える。

「……みんなを護りたいかな」

イルヤンカは再度問う。

「悠二……その先になにを望む？」

悠二は再度答える。

「……できればここで、この町でみんなと共に過ごしたい」

イルヤンカは確認をとる。

「……貴様のことをその『みんな』が忘れてもか？」

悠二は即答する。

「ちょっと寂しいけど、いい。僕がみんなを守れるなら」

「……自分を喰らった者に対する復讐のためではなく、護るために力を使うのか？」

「僕がみんなを護れるようになるための過程だと思うなら、僕を喰らった”徒”に感謝するかな」

「……そうか」

イルヤンカは では と続ける。

「力を望むか？」

悠二は答える。

「望む」

イルヤンカは満足そうな顔をして言う。

「条件がある」

「条件？」

「死ぬな。そして、貴様の可能性を儂に見せろ」

「わかった」

イルヤンカは500年ぶりに人化を解いた。

「……それが君の本当の姿？」

「うむ。これぞ”甲鉄竜”の真の姿だ」

そこには”甲鉄竜”の真名に相応しい巨大な竜がいた。

「…始めるぞ。契約を望む者よ」

「…うん」

「儂に身を委ねよ」

「うん」

「儂に器を差し出せ」

「うん」

「儂を求めよ」

「うん」

「…貴様の望みは？」

「みんなを護ること」

悠二は続ける。

「イルヤンカ。君の望みは？」

「……僕の望みは…主が愛し、好いた人間の、主が憎み、嫌った人間をこの目で、自分の目で見ていきたい。その可能性を見ていきたい」

自分の500年間生きながらえてきた意味を語った。

「わかった。じゃあ、僕はなにをすればいい？」

「僕を求めよ！！」

鈍色の炎が悠二を包む。

その炎が右手首に集中していき、それに比例してイルヤンカは少しずつ薄くなっていき透明に近づいていった。

「（自分の中の何かが失われていく）」

「（でも、嫌じゃないな）」

悠二は鈍色の炎の中そんなことを考えていた。

「（こやつ本当にトーチか！？それにしても器が大きすぎる！！）」

「（そうか…、悠二、お前は『変革を起こす者』だったのだな。ト
ーチでもこれほど
の器を維持できる者は他に考えられない）」

イルヤンカは悠二の器に収まる際少しだけ悠二にサービスをした。

そして…

「成った」

イルヤンカがそう言った時には悠二の髪と瞳は鈍色になっており、
右手首にはガントレット
のようなものがはまっていた。

防具というよりアクセサリーに近い感じではあるが。

「悠二くるぞ！！」

ガントレット状の神器”ティラネン”からイルヤンカの声が発せら
れる。

「え！？イルヤンカどこに？」

「細かいことは後だ！！」

「ビビったぜ！！急にデッケー”徒”が現れるんだから…」

”徒”の遅すぎる到着により戦いの火ぶたは切って落とされた。

「悠二！！イメージだ！！儂の『幕瘴壁』をイメージしろ！！」

「そんなこと言っただて！？無理だって！！」

「よええええな！新米フレイムヘイズ！！」

悠二は”徒”の炎弾を必死によけるの精一杯だった。

「…炎弾ならいけるか？」

「それならまだいけそう！！」

「避けてるだけか！！！！フレイムヘイズ！！！！」

炎弾はコンクリートを抉るだけだか悠二は疲労していく一方である。

「…炎をイメージして」

「ん！？なにしてんだ！！！！フレイムヘイズさんよ！！！！」

「放っ！！！！」

悠二は初めて異能の力を使った。（まあ、フレイムヘイズ特有の人体強化していたが）

その炎弾はあまりにも…

大きすぎた。

「な、なんだこりゃ!! あぶねえ!! な!! おい!!」

炎弾と呼ぶには大きすぎる炎弾は”徒”の横を通りすぎて封絶内の虚空に消えた。

だが”徒”の注意を惹きつけて、次の炎弾の用意する時間は作れた。

「はあああ!!」

今度の炎弾はさっきのものより二回り小さくなっていた。(大きいことには変わらないが)

「そんなのはな!! きかねえよ!!」

”徒”は下から撃たれた炎弾に向かって何発かの炎弾を撃ち込んだ。

炎弾同士がぶつかり、弾けて爆発した。

両者に目立った外傷はなかった。

だが、これが”徒”に致命傷よりもきつい結果になるのだった。

「(炎弾を僕は一発ずつしか撃てないから手数で負ける)」

「(かといって大きいやつを撃っても今みたいになる)」

悠二は爆炎の中考える。

「悠二。フレイムヘイズと”徒”は基本的にイメージした力を行使する。だから…」

「自惚れてみる、思わぬ力が出るやもしれん」

イルヤンカは助言と言えない言葉を言う。

でも、悠二にとってはとてもありがたいものだった。

「（…そう言えばイルヤンカは竜だったよな）」

「（炎を吐きそうだよな…）」

「（できるかな？ いや、違うよな…）」

「（やるんだ！！）」

この10秒あまりの出来事は両者運命を変えた。

「うおおおおおおお！！」

悠二の右手…神器”ティラネン”から炎が噴き出す。

そして、それは悠二の右掌で自在式みぎてのひらになった。

「だああああああ！！」

悠二は雄たけびと共に右手を”徒”に向かって突き出す。

同時に自在式が稼働した。

「な、なんなんだよ！！これはよー！？」

悠二は使った自在法は炎弾に近いものだった。

ただ自在式から高密度の炎が一直線に噴き出すだけの単純なもの。

故に力負けしている場合は防ぎようがない。

避けるという選択もあるがそれはこの”徒”にはとれない。

それほど鈍色の炎は速かった。

「こんなのってーね」

”徒”は断末魔をあげる前に鈍色の炎に吞まれた。

第三話：初陣の後

「はぁ、はぁ、はぁ」

「よくやったと言いたいが…」

「なにか、まだ、あるの？」

「貴様が吹き飛ばした街の修復がな」

「……」

封絶内は基本的に修復できる。しかし、存在の力を消費する。

つまり……

壊した分だけ存在の力を消費して、疲労する。

「あそこまでの威力が出るとは僕も思わなかったが…」

「それよりも封絶が解ける。引き継ぎをしろ」

「え！？解けるって！？引き継ぐってどうやって？」

「封絶内の空間を支配する感じで存在の力を込めろ」

「う、うん。わかった」

悠二は目を閉じた。

その瞬間封絶を作っていた炎が黄緑色から鈍色になった。

「はぁ〜。修復はどんな感じでやればいい？」

「簡単だ。封絶内の空間に存在の力を放ち、戻れと念じろ」

「わかった」

悠二は再度目を閉じて…

「戻れ」

と言った。

それと同時にビデオテープを巻き戻した時のように街が直っていった。

数秒後には戦いなんてなかったように完全に直り切った。

「ふう〜〜」

「初陣にしてはなかなかだった」

「ははは、ありがとう」

悠二は渴ききった笑みでしか答えられなかった。

それほど疲れていた。

「帰って寝よ」

「封絶を解け」

「わかった」

悠二は解けると念じ、封絶を解いた。

「で、ここは？」

悠二は周りを見渡した。

そこには『坂井』の表札があった。

「自信を持て。貴様が護ったのだ」

「……うん」

悠二は少しだけ元気がわいてきたような気がした。

そう。気がした。

「あらあら、悠ちゃん。どうしたのその服？」

悠二の母『坂井 千草』が玄関から顔を出す。

「え……と……こけた？」

「ふふふ、それは大変ね。お風呂沸かすから入りなさい」

千草は抱擁力のある笑みを浮かべて家の中に入っていった。

「……あれが貴様の母君か…」

「なんか文句でも」

「いや、とても親子には見えんな」

「よく言われる」

他愛もない会話をして悠二たちも家の中へ入っていった。

チャプンッ

「生き返るうゝ」

悠二は風呂で伸びをしながら緊張感が完全に抜けた声をあげた。

「…死んではないぞ」

「いつ死んでもおかしくなかったんだから表現としては間違っていないだろ？」

「そういうものか？」

風呂の中にも持ち込まれている（というか外れない）神器”ティラネン”からイルヤンカが疑問いう。

「そういうもののなの」

悠二は極楽気分で少し疑問に感じたことを言った。

「フレイムヘイズって契約者の過去・現在・未来を”紅世の王”に奉げて”王”がその空いた器に入るんだよね？」

「うむ」

「じゃあ、普通はみんな僕のこととは忘れるよね？」

「そうだ」

「じゃあ、母さんは僕のこと忘れてないの？」

それに気づかず普通に家に入った悠二も悠二だが…

「それは契約の際に儂が貴様の居た所にフレイムヘイズとなった貴様の存在を割り込ませたからだ」

「存在を割り込ませた？」

「まあ、今まで通りに生活できると思ってくればよい」

イルヤンカは風呂に入った際に風呂の中に神器を沈められるという奇襲をうけていた。

（悠二には悪気はないが）

その仕返しなのか親切に全てを説明してくれない。

「ふうん」

仕方なく納得した悠二は今度はわざとイルヤンカ（神器）を湯の中に沈めた。

「な、なにをする！？やめんか！」

「ははは」

「笑い事ではない！」

「じゃあ、風呂から上がったらフレイムヘイズのこととか教えてくれる？」

「知らん、自分で調べろ」

イルヤンカは怒りを含んだ声を上げた。

しかし、悠二はいい笑顔で右手を下げていきながら…

「ごめん、聞こえなかったからもう一回言って」

と言った。

イルヤンカは…

「わかったと言ったのだ」
折れるしかなかった。

「で、この神器っていうのがイルヤンカの意志を表層上に持つてくるものってこと？」

風呂から上がった悠二はイルヤンカに約束通り（半分脅したが）フレイムヘイズについて教えて貰っていた。

「うむ。それより大事なことを教えたはずだが？」

「神器には感覚が通ってるだっけ？」

「そうだ」

イルヤンカは神器を沈められたことを恨んでいた。

「フレイムヘイズには称号があるんだよね？どんなやつがあるんだ？」

「例えば『炎髪灼眼の討ち手』や、『万条の仕手』などだな」

悠二は疑問をぶつける。

「僕らにはないの？」

「ない」

「なんでさ」

「フレームヘイズの称号というのは自発的につけたものではなく他人に付けられたものがほとんどだ」

「へえ、じゃあ称号が付けられるのは当分先だね」

「いや、実はもうあるのだ」

「へ!？」

悠二は今日は驚きっぱなしのような気がしていた。

「『千壁の織り手』これが儂らの称号だ。」

「元からあったの？」

「いや、契約の時に考えた」

「あの短い間で!？」

「うむ。それに契約とは実際は短くとも”紅世の王”にはながいののだ」

といっても1分ぐらいの体感時間である。

「名前の由来は？」

「主を護る千の壁を築いた儂とこの街を護る千の壁を築くであろう貴様を掛けた。織り手は主の名から取った」

「主ってよく言うけど誰なの？」

イルヤンカは少し黙る。

悠二はまた悲しい顔をしたイルヤンカに気づき、

「い、ごめん。」

謝る。

しかし、

「よい。いつか話すのだ、早い方が良からう」

つと言って自分の仕えた主のことを口に出す。

「……儂の主の名は『棺の織り手』アシズ。」

「『棺の織り手』？ってフレイムヘイズみたいな名前だけど？」

「主は元フレイムヘイズだった。だが、自分の契約者を人間に殺さ

れた」

悠二は絶句した。

「……人間にとって護ってたものに殺されたってこと!？」

「そうだ」

イルヤンカは続ける。

「これが他のフレイムヘイズだったらよかったかもしれない」

「……どういう意味だ？」

悠二は『他のフレイムヘイズだったらよかった』つという言葉に少し腹を立てた。

「主とその契約者は愛しあっていた」

「……」

悠二は言葉の意味を理解し、腹を立てた自分が少し恥ずかしくなった。

「愛した者を護っていたものに殺された激怒した。そして、周りにいた人間を喰らい、この世に顕現した」

「欲望の肯定こそが全ての”紅世の徒”は主に賛同した。儼もその内の一人であった」

「その数は増えていき「とむらいの鐘」になった。」

「その集団の願い『壮拳』は…主の願いは…」

イルヤンカは悔しそうな声で言う。

「主とその契約者” ティス” の間に子をなすこと」

「子？」

今まで黙って聞いていた悠二があり得ない言葉を聞いて聞き返す。

「そうだ。その子を『両界の嗣子』と呼んだ」

「そんなことできるのか？」

「できる。貴様が想像しているものとは違うがな」

ここまで話してイルヤンカは一息ついた。

第三話：初陣の後（後書き）

キリが悪くてすみません

第四話：悠ちゃん（前書き）

今回はやたら短いです。

あとがきにアンケートがあるのでできれば答えていってください。

第四話：悠ちゃん

イルヤンカは少し黙ってから

「最後の戦い『大戦』で『両界の嗣子』の誕生をまじかにして：フ
レイムヘイズ

『炎髪灼眼の討ち手』によって討滅させられた」

イルヤンカは寂びしそうな声で使う言うが、半分踏ん切りがついた
ように

「これが儂の『主』の大まかな説明だ」

っと言った。

悠二はイルヤンカの話聞いて：

「ありがとう」

っと言う。

「：？」

イルヤンカは無言で言葉の意味の説明を求めた。

悠二は察して答える。

「話たくないことを話してくれたから、断ることもできたのに話し
てくれたから」

悠二はだからって続ける

「ありがとう」

「……貴様は『主』の話聞いてなにも思わないのか？」

「うーん……。一途な王だなあかな」

イルヤンカは少し黙った。

しかし、さっきの沈黙と違い驚愕の沈黙だった。

だがそれはすぐ破られた。

「ふっ、はは、はははは はは！」

イルヤンカの笑い声によって。

悠二は少しいじけたような声を上げる。

「なんだよ……おかしいこと言ったか？」

「言ったさ。言った。大いに滑稽なことを言った。最悪と言われた
”紅世の王”の一人を
一途な王とはな」

「まっ、いっか。でも……笑いすぎじゃない？」

まだ、笑っているイルヤンカに非難の声を上げる。

それと同時にもしイルヤンカが竜の状態でこんなに笑ってたら街が大変なことになるだろう
なあってどうでもいいことを考えていた。

「は、はは、はぁ。すまないな笑いすぎた」

「…もういいよ。一回寝る。」

悠二はさつきより不貞腐れて寝ようとするが…

「悠ちゃん。ご飯できたわよー」

下からの母からの呼び出しにより阻止される。

「寝ないのか？ ゆーちゃん」

「……」

悠二はさらに不貞腐れながらも下に降りる。

「……こんどこそ寝てやる！」

悠二はベットに倒れ込む。

母がトーチでないことが確認できて安心したのも眠気の原因だろう。

「……そうもいかん」

「っえ!？」

悠二はまた眠りを妨げられる。

「この街に”王”がいることは話したな？」

「うん」

「乱獲者にとってフレイムヘイズは邪魔な存在でしかない。つまり、”王”がここに攻めにくる可能性がある」

「……」

悠二は護るべき力を護るべき者が巻き込まれてしまうことを恐れた。

「失いたくないのだろう？」

悠二は肯く。

「では今日から鍛錬の開始だ。儂のフレイムヘイズなら『幕障壁』かそれに類似したものが使えるはずだ。まずそれを使えるようにしろ」

悠二の濃密な春休みは始まりを迎えた。

第四話：悠ちゃん（後書き）

アンケートを何個かとりまします。

一つ目…あと何話か春休み編を書く。それともすぐさまシャナを出す
（原作一巻になる）。

二つ目…悠二がフレイムヘイズになったことにより『平井 ゆかり』
が生き残ります。メインヒロインはシャナのままですが平井さんを
サブヒロインにするかどうか

三つ目…吉田の登場回数（私が書くときと少なくなります）が、多くして
ほしいと要望が多ければ原作ぐらいにはしていきます

四つ目…吉田をブラックにするか、元のままにするか。

これで今回のアンケートは終了です。これから何回かアンケートと
りますので
ご協力お願いします。

第五話：自在法（前書き）

アンケート結果が集まらないため、一応春休み編を続けてほしいって意見が
強かったので春休み編を書きます。

第五話…自在法

悠二はイルヤンカに言われた通りに自在法の特訓をしようとした。

そう、しようとした。

つまりできないでいた。

意気込んで特訓しようと思っていた悠二は一步目からつまずた。

「……なにをすればいい？」

悠二は恥ずかしいのを隠してイルヤンカに聞く。

「……うむ、まず小さく封絶を張れ」

「わかった」

悠二は坂井家を包むぐらい封絶を張った。

「…それで？」

「あ、ああ」

イルヤンカは実は悠二を試すつもりで「小さく封絶を張れ」つという命令をだした。

が、悠二はなんの苦もなく小さい封絶を張った。

封絶は張れたとしてもなかなか力の加減までは慣れるまではできないものだ。

それができるといふことは……

「（咄嗟の自在法といい、今の封絶といい……こいつは本当にただの人間だった者か？時間を掛ければ『弔詞の読み手』を超えるやもしれん）」

「イルヤンカ？」

「（しかし、こいつは元トーチで常に少しずつ存在の力を消費している。フレイムヘイズの力で消費を回復が上回っているが戦闘時に障害になることは変わらない）」

「あのー、イルヤンカさん？」

「（しかもこの街には”王”がいる。いちまでもフレイムヘイズを見逃してくれとは思えん。

普通は今すぐにでも排除しにくるはずだ。それをしないということ……他に優先すべきこととがあるっということか）」

「……」

「（だが、これは憶測でしかない。軽視しては足元をすくわれるが……今来ていないという
事実は変わらんのだ。この時間を利用してこやつを鍛えなければならぬ）」

「イルヤンカ!!」

「なんだ!!」

悠二の声にイルヤンカ怒声を上げる。

「なんだ!! ってそれで? って聞いてから返答がないから呼んだよ
…」

「ああ、すまぬ。少々考え事をな」

「考え事ねえ…まあいいや。それよりこの後は?」

悠二はきつと聞かれたくないことなのだろうと思い話を打ち切る。

「先の戦いで使った自在法を今出せるか?」

「え!?! あれを今ここで!?!」

「馬鹿者。自在式だけ、もしくは小規模だ」

「ですよねえ」

悠二は少しふざけた口調ながらも夕方の戦いのことを思い出す。

「(あの時にイメージしたのはイルヤンカの本来の姿)」

「(みんなを護るために自分が生きる)」

「（そのための自在法…）」

「はっ！！」

神器”ティラネン”から火の粉が噴き出し悠二の手に集まり自在式となった。

でも、炎はでない。完全に悠二は制御できていた。

「…ふむ」

イルヤンカはやはりといった声を上げる。

自分の契約者坂井 悠二は自在師の才能に富んでいた。

それに少しだが”王”に勝てるかもしれないという希望を抱く。

が、そんなに甘くないと考えを改める。

「悠二。貴様はその自在法の特訓をあまりしなくてよい」

「へ？」

自分が完全に制御できていることを知らない悠二は素っ頓狂な声を上げる。

「代わりに『幕障壁』をなんとかして使えるようにしてもらおう」

「え！？」

悠二は驚きながらも疑問を感じていた。

「『幕瘴壁』ってあの岩出すやつだよね？」

「そうだ」

「じゃあ、イルヤンカの自在法だよね？」

「当たり前だ」

「僕が使えるの？」

「フレイムヘイズは契約した”王”の力の影響を受ける。故に似た力、または同じ力使うことが多い」

「へえ」

悠二は納得と感心の表情をした。

「故にやろうと思えば『幕瘴壁』を使うこともできる」

「…でも、難しいだろう？」

「当たり前だ。儂の『幕瘴壁』は500年前では”最硬”の自在法と言われていたのだ」

「最高？」

「貴様が考えているものとは多分違う。最も硬いという意味だ」

「ああ。って、えええええ!!」

悠二は今日3番目ぐらいに驚いた。

「イルヤンカってそんなに凄いの!?!」

「……貴様」

イルヤンカは静かに怒る。

だが、それに気付かず驚いている。

「そんな自在法使えるわけないじゃん!!」

「使えるようになれ」

悠二は気づかない。

自分の才能に。

「貴様は『幕瘴壁』を2回見ている。これはかなり大きな糧^{かて}となるだろう。」

貴様の力という多飯喰らいへのな」

イルヤンカは怒りを鎮めて諭す。

無知な契約者に。

「……できるかな?」

「やれ。そうしなければできるものもできん」

「わかった」

イルヤンカの不親切な言葉がなによりも心強いと感じてしまった
悠二だった。

第五話：自在法（後書き）

アンケートまだ受け付けてます！

第六話：零時迷子（前書き）

アンケートに答えてくれる人ありがとうございます。

そして、まだ答えてない人も是非答えてください。

第六話：零時迷子

「……イルヤンカ」

「なんだ」

「これって意味あるの？」

悠二は封絶を解いた自分の部屋で座禅をしていた。

「貴様：話を聞いていたか？」

「うん。フレイムヘイズはイメージが大切で自分が勝つイメージができないやつは力を

発揮できない。これは徒にも言えること。でしょ？」

「…覚えているになぜ疑問に思う？」

イルヤンカは悠二の疑問に対して疑問を抱く。

「いや、僕が言いたいの…」

「なぜ、座禅なのか！ってこと」

悠二の声には少々の怒りが含まれていた。

「正座がいいのか？」

イルヤンカは悠二の心の叫びに対して的外れな受け答えをする。

「そうことじゃないって！座禅や、正座は痛いから別の姿勢でもいいだろうってこと」

イルヤンカはなるほどって言ってから…

「だめだ」

と言った。

「なんでさ？」

「痛みを伴った方が頭に残る。」

「そういうもののなの？」

「そういうものだ。だから黙って儂が『漠瘴壁』を使った時のこと
思い出し、自分がそれ
を使う姿を想像しろ」

「わかったよ」

悠二は座禅のまま目を閉じて、自分の世界に入っていた。

「…坂井 悠二！いつまで寝ている！！」

「…ん？」

イルヤンカの声で悠二は目を覚ます。

「今何時か言ってみろ」

「…12時ちょっと前」

悠二は覚醒しきつてない頭で答える。

そして、すぐに覚醒することになった。

「あ、足が！！し、痺れて！」

座禅のまま寝ていたのだから当たり前である。

「少し寝かせるつもりであったが……。よく座禅のままあそこまで熟睡できたものだ」

イルヤンカは関心1呆れ9で悠二を評価した。

そんなことを言ってる間に……

ピピピ…

悠二の部屋にある電子時計が午前零時を告げる。

この電子音になんども起こされたことのある悠二はそろそろ時計を変えようと聞きたび

に思っていた。

だが、今日は思えなかった。

ボツ

「「ッ!？」」

悠二の足の痺れが消えた。

それだけではない体中の疲れが消え去った。

「え、なにがおきたの？」

悠二の疑問に答えることはイルヤンカにはできなかった。

無理に答えるなら、

存在の力が全回復した。

っと言うしかなかった。

「……悠二」

「これってなんなの？ フレイムヘイズの力なの？」

混乱している悠二。

予想外の事態に困惑するイルヤンカ。

「これから話すことは重要なことだ。心して聞け」

「え、あ、うん。わかった」

悠二はなんとか冷静になろうとする。

「貴様に蔵^{ぞう}する宝具のことだが…」

「わかったの!?!」

「うむ」

イルヤンカは躊躇ってから

「“紅世”の秘宝中の秘宝『零時迷子』だ」

つと言った。

『零時迷子』

それはかつて一人の”王”が、恋に落ちた人間を『永遠の恋人』とするために作ったと

いわれる永久機関だった。

つまる所、一日に消費した存在の力なら後日の午前零時になれば回復するっと言った

ものだ。

第六話：零時迷子（後書き）

やたら短くてごめんなさい。

第7話：朝（前書き）

テストがあるので短めですがどうぞ

第7話：朝

「ん、ん」

「情けない声だな」

悠二は朝から契約主の”王”に小言を言われるっと言う最悪？の目覚めを味わった。

「最悪とはいい度胸だ」

「え！？声にでてた！？」

「ほお、勘だったのだが。本当に思っていたようとは」

悠二にとって本当に最悪の目覚めになってしまった。

朝食の時、神器”ティラネン”を見た坂井 千草は、

「あらあら。そうね、悠ちゃんも高校生になるんですもんね。それくらいのアクセサリーは必要よね」

っと自分1人で納得してしまった。

そんなことがあった朝食の後身仕度を済ませた悠二は自分の部屋に

来ていた。

「鍛練は夜からだっけ？」

「うむ。昼間に鍛練をやり存在の力が切れている状態で紅世の徒に襲われたらたまったものではない」

「だよね…。じゃあ、昼間は自由だよね？」

「うむ。」

イルヤンカはだがつと続ける。

「たしか貴様は学生だったな？」

「え、あ、うん。4月から高校生だけど…」

「今は、確か長期休暇の最中だったな？」

「そうだけど…」

悠二はイルヤンカの質問の意図があまり理解できなかった。

「では課題があるのではないか？」

「……」

悠二は目を逸らす。

まるで現実逃避するように。

「…あるようだな」

「…はい」

「終わっているのか？」

「…いいえ？」

「どのくらいで終わる？」

「…見当もつきません」

悠二は契約主の”王”の質問に敬語で答える。

「今日中に終わらせろ」

「え！？今日中！？」

「いいな」

「え、あ、ちょっと」

「い・い・な」

「…はい」

悠二は渋々机に向かった。

「お、終わったあゝ」

初めたのが8時ごろで現時刻は12時である。

つまり、4時間課題をやっていたことになる。

ちよつとでも休もうとすれば契約主の”王”から激が飛ぶ。

ちよつと前まで中学生だった悠二に少々きつかった。

これならテストとかの方がよっぽどましとさえ悠二は思っている。

「うむ。やればできるではないか」

手首から聞こえる契約主の”王”の賞賛の声も今の悠二にはどうでもよかった。

「もう、もうダメだ。動きたくない」

そんな悠二には些細な贈り物があった。

「悠ちゃん。ご飯できたわよ」

昼食と言う名の。

しかたなしに体に力を入れる。

「うごきたくないのではないのか？」

契約主の”王”は笑いを堪えながらも悠二をからかう。

そんな悠二は、

コッソ

かるく神器を小突くのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4441y/>

千壁の織り手

2011年12月3日16時46分発行